論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　加藤陽子

本論文は、日本語の話し言葉に現れる“引用標識「ト」「ッテ」の後に音声的な休止がある発話”を対象に、これらの話し言葉の談話における働きを考察することを目的とした。本論文では具体的に、以下２点を研究目的とした。

目的１）実際の話し言葉資料を分析し、そこから取り上げられた話し言葉に特有な引用表現を対象に、それぞれの談話における機能・話し言葉でこうした表現を使用する意義を明らかにする。

目的２）各表現を機能の観点から大きくまとめ、また、引用の機能の広がりを引用標識の多機能化という観点から捉える。こうした観察を通して、これらに共通した話し言葉における引用標識の機能を追究する。

本研究では、話し言葉の性質、使用される表現の統語・意味的特徴、また表現の使用にあたり観察される語用論的・相互作用的要素との関係に注意を払いつつ、実例の観察からその背景に存在する言語事実を考察するという帰納的立場で記述を進めた。

本論文は、十章から成る。「話し言葉」と「引用」についてまとめた第一章、先行研究をまとめた第二章に続き、第三章で機能の点から行った５つの大きい分類を提示する。この章で提示した機能による５つの分類とその下位用法の位置付けは、本論文の研究目的の②「各表現を機能の観点から大きくまとめ」ることに対応する部分である。そして、この第三章で提示された５つの分類とその下位用法について、一分類に一章をあてる形で、本論文の本論部分に当たる第四章～八章を置く。この本論部分では、研究目的の①「これらの、談話における機能、発話者が話し言葉でこうした表現を使用する意義を明らかにする」を達成するべく、５つの分類の下位に属する計 15 の用法について詳しく分析する。次の第九章では、本論文で取り上げた 15 の用法のうち、引用標識で発話が終了する 13 の用法について、「引用標識の多機能化・機能拡張」の観点から、分類を試みた。これは、研究目的の②「引用の機能の広がりを引用標識の多機能化という観点から捉える」に対応する。結論に当たる最終章の第十章においては、機能の観点からの分類、及び機能拡張の観点からの分類をあわせ、話し言葉における引用標識の全体像を提示し、更に、こうした観察から導かれる引用標識の共通機能について論じている。

本研究で明らかになったのは、以下の二点である。

第一点目は、引用標識「ト」「ッテ」が、話し言葉の談話の中で、単に引用部を表示するのに止まらない多様な機能を担いながら使用されていることである。省略により生まれ話し言葉独自の構造を持つもの、話者の心的態度や認識を示すものなど、下位分類は 15 に上った。また、その様々な用法の使用の背景には、「話し言葉」の「談話」が持つ性質が、動機としてそれぞれに存

在していることも観察された。第二点目は、これらの様々な用法を引用標識の多機能性という観点から分析し、機能拡張のスケール上に並べた結果、機能拡張の程度が様々に異なることが観察されたことである。これは、現在話し言葉において、様々な機能拡張の程度を持つ多数の引用表現が使用されているという事実（引用の機能の広がり）を示している。また、これらは大まかに、機能拡張の進んでいないものと進んでいるものが、「引用の基本的な形式（構文）の一部省略により生まれたもの」と、「話者の認識や心的態度等を表示するもの」を両極として、ある程度の機能的な「まとまり」を持って並べられることも明らかになった。

さらに、本研究では、話し言葉の談話における引用標識の共通機能は、引用部と、引用標識が持つ記号としての質の差を利用して、「引用標識により境界を設定する」という「境界設定機能」、及び、「引用部内の情報を卓立した情報として談話の中に提示する」という「引用部卓立機能」の二つにまとめられると主張した。そしてこれらの機能は、時間的に言語を生成する時間が限られていて、多くの場合聞き手との相互作用があり、発した後にすぐ消えていく音声記号の形で表出される「話し言葉」の環境の中で、談話の情報処理に貢献していることを論じている。

話し言葉に焦点をあてて引用表現を分析した研究はまだ少なく、本研究ほど包括的かつ詳細に引用表現の機能を記述し明示した研究もこれまでに類をみない。その意味で、本研究の当該研究領域への貢献と学問的意義は非常に大きい。書き言葉とは異なる、話し言葉に特有の引用表現の使用に関する現象に着目した研究の着眼点がまず評価できる。よい現象を捉えることを出発的とし、さらに、生きた談話データの綿密な分析をとおして、談話における引用標識の機能を明らかにしており、これらの論証において提示したデータ自体が価値の高いものであるという点も高く評価できる。同時に、引用標識の機能の一つ一つを丁寧に分析し論証するに留まらず、その多機能性を、引用標識の機能の広がりとまとまりとして包括的に捉えるための体系・枠組みの提示を試みた点も、本論文の意義深い特徴である。

これらの独自性をもつ本研究は、第一に、日本語の引用標識の機能を明らかするという点で、日本語学における日本語の記述に貢献するものである。第二に、日本語の引用表現の分析をとおし、話し言葉における引用標識の機能に関する研究一般に重要な示唆を与えうる事例研究であるといえる。さらに、話者間の相互作用を伴い即時性をもつ談話場面における引用標識の使用に関する分析をとおし、「文法と談話」という重要な研究領域の深化に貢献しうる事例研究である。

とはいうものの、改善の余地や残された問題が全くないわけではない。審査では、いくつかの課題が指摘された。まず、引用標識の機能一つ一つの分析・記述とそれらの分類は堅実に行われているが、それらの広がりとまとまりを包括的に捉えるための枠組みの構築は十分であるとはいえず、今後の課題として残る。特に、機能の広がりとその多機能化の程度を分析するために用いた「引用の基本形」の決定基準と論拠が、明確に論述できているとはいえない。また、本論文では「と」「って」という引用標識を分析対象とし、それら二つの異なる形式を縦断する引用標識の機能を包括的に分類し記述す

ることを主たる目的にしていたが、それぞれの特徴づけは試みているものの、それぞれの形式とその機能に関するより綿密な分析・記述に関しては、著者の今後の研究成果が大いに期待される。また論述面では、綿密な論述スタイルは周到な著者の研究の優れた点の現れでもあるが、一般的著書・論文としては、読者に大局がより分かりやすい論述スタイルに改善の余地がある。

しかし、これらの指摘は、本研究の根幹を左右するようなものではなく、また多くは著者の今後の継続的研究に期すべき点であり、本論文の意義深い学術的貢献をいささかも損なうものではない。

以上の理由により、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。